発表要旨

Bayesian Dynamic Stochastic General Equilibrium Approach on Remittances and Economic Impact in Asian Countries

Katsushi TABATA (二松学舎大学)
Noriyuki SUZUKI (大和総研)
Akifumi NAKANISHI (大和総研)

リミッタンス（remittance）とは、労働者のクロスボーダーでの資金送金のことである。近年、その額は急増しており、公式ベースの額でも約 3000 億ドルという巨額の送金額になっている。この額は、直接投資の資金フローの規模を上回る水準であり、特に、アジア諸国は中南米諸国を上回る世界一の取引となっている。さらに、非公式の地下送金では、桁が違う額が取引されていると言われている。例えば、ネパールなどはGDPを上回る資金が、リミッタンスとして、国内に送金されている（ネパール中銀担当者談）。

世銀や IMF は、その経済効果と国内政策に与えるインパクトについて、大きな関心を持ち、このための調査部門を立ち上げ研究を開始している。さらに、インド、イスラエルは、この資金を金融的に活かし（例えば DIASPORA（原義は懐かしい祖国を思う愛国心）ボンド）、それを開発資金に転用する手法を取り入れ実用している。

残念ながら、東アジアは量的には世界最大ではあるものの、研究も実際の手法の整備も遅れている。本論文は、フィリピンを対象に動学的一般均衡モデルを作成し、リミッタンスの経済効果を分析している。最近、ベイジアンの手法を取り入れた、DSGE のモデル分析が行われるようになったが、これを参考にアジアでの応用を試みている。本論文は、リミッタンスの開発資金への利用が効果をあげる上で、金融の深化が重要なファクターとなるという知見を得た。

ただし、アジアへの DSGE の応用はかなり難しい課題があるようである。特に、データ制約、先行研究が少ない中で、説明力の高い頑強なモデルを設定することは、容易ではない。これを克服する手段として、ベイジアンの手法を適応して、この障害を軽減できないか、試行錯誤をしている。発表では、採用した DSGE の手法を中心に論じることにしたい。

参考文献

Ralph Chami, Adolfo Barajas, Thomas Cosimano, Connel Fullenkamp, Michael Gapen, and Peter Montiel. “Macroeconomic Consequences of Remittances.” IMF Occasional Paper 259, Washington D.C., International Monetary Fund, 2008.